

国を豊かにするのはなにか？

——壮大な問いに経済学者が答える

"What Makes a Nation Rich? One Economist's Big Answer," *Esquire*, Nov 18, 2009

あなたが世界の指導者で、自国の経済を繁栄させたいとお望みなら、MIT の学者でクラークメダル受賞者でもあるアセモグル氏が、かんたんな解決策をおしえてくれる：「手始めに自由選挙を」

ダロン・アセモグル

Daron Acemoglu

ぼくらは豊かな先進国の人間、持てる者だ。あとの大半の人たち——アフリカ・南アジア・南米・ソマリア・ボリヴィア・バングラデシュの人たちは持たざる者だ。世界はいままでずっとこの有様で、豊かな者と貧しい者、健やかな者と病める者、飽食と飢餓に二分されている。今日の諸国間の格差の度合いは、かつてないまでになっている：合衆国の平均的な市民の豊かさは、平均的グアテマラ人の 10 倍、平均的北朝鮮人の 20 倍、平均的なマリ・エイオピア・コンゴ・シエラレオネ人の 40 倍にあたる。

社会科学者たちが何世紀にもわたって研究しつつこれといって成果もあがっていない問い、それは「なぜ？」だ。でも、彼らが問うべきだったのはこちらだ：「いかにして？」 格差はあらかじめ決定されているわけではないからだ。国は子供とはちがう——国はうまれながらに豊かな子と貧しい子に決まっているわけじゃない。国々の政府が貧富をわけているんだ。

格差に関する理論をたどると、フランスの哲学者モンテスキューにたどりつく。18 世紀なかば、彼はとてもかんたんな説明を思いついた：「熱帯の連中はもともとなまけものだからさ」 ほどなく、これほど大雑把じゃない説明がいくつか出されていった：「マックス・ウェーバーのいうプロテスタントの勤労倫理が経済的成功の真の推進器なんじゃない？」とか、「もっとも豊かな国々はどれもかつてイギリス植民地だったんじゃないか？」とか、「いや、単純に、ヨーロッパ人の子孫がしめる人口がいちばん多い国がどこか調べてみればいいんじゃないの？」という具合だ。こうした理論はどれも同じ難点がある。それは、表面的には特定の事例にうまく合っているように見えるけれど、他の事例にあたると根底から反証されてしまう、という難点だ。

近年になって提出されている理論でも、事情はかわらない。地球研究所所長をつとめる経済学者のジェフリー・サックスは、いろんな国々の相対的な成功は地理と気候に由来していると主張している：つまり、彼に言わせると、世界でいちばん貧しい地域は熱帯で土壌が貧しく、農業をやるのがむずかしいし、熱帯の気候は病気（とくにマラリア）をひろめやすい。そうすると、そうした国々の市民たちによりよい農業技術を教え、マラリアを根絶するか、せめて抗マラリア剤のアーテミスニンを与えてこうした問題を解決すれば、貧困は一掃できることになる。いや、いっそ、彼らに移住させて、住むのに適さない土地をまるごと放棄してもらえばいいかもしれない。

著名なエコロジストにして売れっ子作家のジャレド・ダイヤモンドはこれとちがう理論を出している：世界の格差の起源をたどると、植物や動物の分布と技術進歩の歴史のちがいにいきつく、と彼はいう。ダイヤモンドによると、植物の栽培を最初に学習した文化は鋤を使うことを最初に学習した文化であり、したがって最初に他の技術も学習した文化となった。そして、技術はあらゆる経済的成功の推進器だ。だとすると、おそらく、世界の格差を解決するカギは技術にあるわけだ——なら、途上国をインターネットと携帯電話に接続すればいい。

たしかにサックスやダイヤモンドは貧困の一部の側面についてはすぐれた洞察をしめしている。でも、彼らもモンテスキューその他の人たちと同じ難点を抱えている：彼らはインセンティブを無視しているんだ。人々が投資や発展をするにはインセンティブが必要となる。がんばって働けばお金が稼げるし稼いだお金は自分のものにしておけると人々が知っている必要がある。そして、こうしたインセンティブを保証するカギとなるのは、頑健な制度だ——法の支配・治安・統治システムが成功と革新の機会を提供することが必要となる。持てる者をもたざる者からわかつのはこれに他ならない。地理や気候や技術や疫病や民族性じゃなく、制度がカギなんだ。

ようするに：「インセンティブを改善すれば貧困は改善される。そして、制度を改善したいなら、政府を改善しないとイケない。」

制度がそれほどまでに国々の貧富にとって重要だと、どうしてわかる？ まずはノガレスに目を向けてみよう。ノガレスはメキシコ-アメリカ国境のフェンスで二分されている都市だ。どちらの片割れも、地理のちがいはない。天候も同じだ。同じ風が吹き、同じ土壌の上にある。地理と天候によりもたらされる病気の種類も同じだし、住人たちの民族・文化・言語といった背景も変わらない。論理上、この都市のそれぞれの片割れは経済的に同一となるはずだ。

ところが、2つは同一どころの話じゃない。

国境のフェンスをはさんだ片方、アリゾナ州サンタ・クルーズ側では、家計の所得の中

中央値は3万ドルだ。ほんの数フィート向こうでは、それが1万ドルとなっている。一方ではティーンエイジャーの大半は公立高校に通っていて、成人の大半は高卒。もう一方では、住民のうち高校に通うのはほんのわずかで、大学どころじゃない。アリゾナ側の人たちは比較的的健康状態にめぐまれ、65歳以上だとメディケアがある。もちろん道路交通網や電気、電話サービスは効率的で、下水も公共医療システムも問題なく機能している。そうしたことは、国境の向こうではまったく提供されていない。フェンスの向こうでは、道路は最悪だし、乳児死亡率は高く、電気・電話サービスは高くつくうえにとどき不具合をおこす。

カギとなっている相違点は、国境の北側では方と秩序があり政府のサービスは信頼できるという点——日常の生活と仕事をつつがなくこなせ、生命や安全や財産権を失う恐れなんてない、という点だ。国境の反対側では、住民は犯罪と不正にまみれ不安定な制度のもとに暮らしている。

ノガレスはこの上なく一目瞭然な事例だけど、事例がこれ1つしかないなんてことはない。シンガポールを例にとってみよう。かつては貧しい熱帯の島国だったシンガポールは、イギリスの植民地支配者たちが財産権を尊重し貿易を奨励したあと、アジアでもっとも豊かな国になっている。あるいは、中国。停滞と飢餓が何10年と続いていたこの国は、ひとたび鄧小平が私有財産権を農業さらには工業に導入するや、一変してしまった。あるいはボツワナ。他のアフリカ諸国が衰退しているのをよそにその経済は過去40年にわたり繁栄しつづけている。強力な部族制度と初期に選出された指導者たちの先見の明ある国づくりのおかげだ。

今度は経済と政治の失敗に目を向けてみよう。まずはシエラ・レオネ。この国はまともに機能する制度もない。ダイヤモンドはやたら大量にあるせいで内戦や争いが数十年もつづき、いまなお不正はチェックされずにまかりとおっている。あるいは共産主義の北朝鮮をみてもいい。地理・民族・文化では資本主義の南の隣国のそっくり鏡写しの国でありながら、その10倍も貧しい。あるいはエジプト。もっとも偉大な文明をはぐくんだこの国は、オスマン朝トルコとそれにつづくヨーロッパ人の植民地化からずっと停滞がつづき、しかも独立後の政府のもとでは経済活動と市場が制限をうけてさらに悪化してしまった。このように、この理論は世界の大半の格差にみられるパターンを明らかにするのに使える。

国々が貧しい理由がわかれば、あとはどうやってそうした国々を手助けすればいいのかが問題となる。外部から制度を強制しようとしてもぼくらの能力にはかぎりがある。これは最近アメリカがアフリカやイラクで経験していることから明らかだ。でも、望みがないわけじゃない。多くの事例では、できることはたくさんある。機会さえあれば、世界で最も抑圧されている市民だって独裁者に立ち向かう。このことは先だってイランでみられたし、数年前にはウクライナのオレンジ革命でもみられた。

こうしたタイプの運動の支援で合衆国は消極的な役割にとどまっていはいけない。ぼくらの海外政策は、禁輸処置や外交をつうじて抑圧的な体制を処罰し、市民たちを支援すべきだ。アメリカは1970年代以来パキスタンでムハンマド・ズィヤー・ウル・ハクを暗黙裏に支え、1965年から1997年までコンゴでモブツ体制による権力の私物化にこっそりと手を貸した。そんな風にアメリカの短期的な海外政策を支持しているからといって独裁者を支援する時代は、終わりにしなきゃいけない。なぜなら、長期の帰結があまりに高くつくからだ——市民は貧しく、子供たちは栄養不良で飢餓状態にあり、反抗的な若者たちは不満からテロリズムの魅惑に引き寄せられる、国全体がそういうありさまになるコストはあまりに高い。そうであるなら、パキスタン・グルジア・サウジアラビア・ナイジェリアその他のアフリカ諸国がもっと透明性と公開性を高め、より民主的になるように後押ししなくてはならない。彼らが短期的にはテロに対する戦争でぼくらの同盟国であろうとなかろうとだ。

ミクロの水準の話をする、海外の市民を手助けするには、教育や活動の現代的な手段（とりわけインターネット）を提供することができるし、あるいは、暗号化技術や携帯電話プラットフォームを提供して中国やイランのような抑圧的政府が情報の力を恐れて設置しているファイアウォールや検閲を回避できるようにする手もある。

グローバルな格差は何千年もぼくらについてまわり、過去150年ほどでかつてない水準にまで達してさえている。これを根絶するのはどうみてもかんたんなことじゃない。でも、失敗した政府や制度が貧困の発生にはたしている役割を理解すれば、この傾向を逆転させる戦いに勝機はある。

アセモグルはハーバード大学教授ジェームズ・ロビンソンと格差に関する本を執筆中。この文章は同書の一部を用いている。